

「底が突き抜けた」時代の歩き方 301

「革命」の二字はあまりにも重たかった - 映画『光の雨』

結局のところ、映画『光の雨』は連合赤軍事件について描かなくてはならない肝心な点を描き出すことはできなかった。これは明白である。その意味では失敗作であるが、だが描きだした点よりも描きだせなかった膨大さによって、この失敗作に意味が集中していることもまた間違いない。たとえば、こういうことがいえる。「自分が21世紀を迎えられないという気持ち」(『キネマ旬報』01年12月下旬号)に駆り立てられて、高橋伴明監督は単なる過去の事実の再現というテレビの特別番組的ノンフィクションに陥らないように、劇中劇の手法を用いた二重構造において30年後の現在につながる工夫を凝らし、映画『光の雨』を我々の前に突きだしてみせた。少なくとも聞く耳さえ持つなら、連合赤軍事件が突出した時代を共有した同世代に対しては、お前はその後どのように生きてきたか、という問いがそこに鳴り響いているのを感じ取ったにちがいない。もし事件の身近にいた者であるなら、事件に対する未了の総括が不意に想い起こされたかもしれない。

どんな感想を抱くにせよ、この映画によって胸が騒ぎだす一瞬を味わうことになるのは確かだ。なににもかも忘れ去ってしまったようにみえる30年後の現在を少しは泡立てるぐらいの衝撃力を、この映画は備えている。というより、連合赤軍事件そのものが忌むべき禍々しい記憶を地の底から揺らめ続かせている。この映画が製作され公開されなければ、連合赤軍事件についてももう一度(根底から)考えてみようとする気持は起こらなかったかもしれない。失敗作であろうとなんでであろうと、この映画が連合赤軍事件の前に一瞬でも我々を立たせようとした点が大きい。この映画が失敗作だと思えてくるのも、事件について考える中に踏み入っているからだ。映画は間違いなく連合赤軍事件の前に改めて我々を立たせ、各々の人生に対する総括に押しだされるようにして、更にはその中に踏み入るかどうかを試みているのが感じられる。

映画そのものが失敗作であるだけではない。監督を含む製作者たちや出演者、そして原作者たちが、この映画で一体なにが描きだされたのかを映画の完成後に問い返すことよりも、撮影の困難な映画が仕上がったことの充足感に浸っているようにみえる雰囲気、なによりもこの映画の限界が露呈している。若い俳優が変貌するドキュメンタリー映画の一面を備えていることについて、「それは撮影現場でもそうでした。役に入っていくこともさることながら、あの過酷な環境は若い俳優の顔を確実に変えていきました。

だからあれはリアルですよ。何でもいつら自分の言葉を持たないのかという不満もありましたが、後日談として、彼らはいまだに団体で互いに連絡を取り合って、飲んだり、誰かのアパートに行ったりして集まっているのです。それを連帯とは言いませんが、この映画に出たことで、彼らも何かを得たのでしょうか。僕自身としては、この映画を作ること石を投げて、次へ進みたかったという目的を達成できたと思います」と、高橋監督は先の同じ『キネマ旬報』で語っている。

「あの過酷な環境」とは、厳冬の知床山中に設定された小屋での合宿同然の撮影生活だと思われる。連合赤軍事件をテーマにしているかどうかにかかわらず、閉じ込められた環境下で寝食共にしながら、撮影の演技に打ち込んできたことを指しているのだろう。

「彼らはいまだに団体で互いに連絡を取り合って、飲んだり、誰かのアパートに行ったりして集まっている」のは、撮影時に醸しだされた濃密な関係が撮影終了後も引き続いていくということであり、いわば同窓会的雰囲気とみられる。監督はそんな俳優のつながりについて、「この映画に出たことで、彼らも何かを得たのでしょうか」と暗に評価するが、もちろん、彼らが何を得たのは語りえないだけでなく、考えてみようとしなない。彼らに対するこの評価は、「僕自身としては、この映画を作ること石を投げて、次へ進みたかったという目的を達成できたと思」うという、監督自らへの評価と重なり、どのような「石を投げ」たのかについては、もちろん、突き詰めようとはしない。

私の推測では、若手俳優たちがこれまでどの映画でも味わうことのなかったほかの共演者との濃密な仲間意識を感じ合っていることこそが、連合赤軍事件の中にほとんど踏み入ることがなかったことを逆照している。もし撮影現場の過酷さ以上に、役作りによって事件にいくらかでも踏み入る過酷さを味わっていたなら、同窓会意識など吹っ飛んだにちがいないと思われるからだ。体育会系にも似た擬似連帯感の^{のどか}長閑さなど容易に寄せ付けない憂愁が、少しは漂っていてもよかった。「どうやれば今の映画になるのか。若い人にどう見せればいいのかという」、高橋監督たちスタッフが映画化の最大の難関の突破を劇中劇の二重構造という工夫にあまりにも委ねすぎて、事件のテーマそのものが30年後の現在に甦り、伝わりうる通路の創出の格闘が全くといっていいほど顧みられていないところからも、その問題は押し寄せているにちがいない。

「本当はみんないい子だったと僕は思いたい」、「理想の世界を作る虜になっていた」という原作者の立松和平自身のナレーションも、この映画を製作者たち仲間内のものになっている。そのラストに流れるナレーションは、「この今を生きている君たちの夢は何か。ぼくらは革命の夢を見ていた。……夢を引き継いでくれとは絶対にいわない」、「こんなにも長くて苦しい物語を、本当によく辛抱して聞いてくれた。本当にありがとう」と続く。立松和平は映画パンフに寄せた一文の中で、連合赤軍事件について、「革命運動をラディカルにおし進めていって、論理を先鋭に追い詰めていき、結果は同志を殺したこ

とで終わってしまったのだ。幾時代かをとおして連綿とつづいてきた精神活動を、斧で断ち切るようにして断絶させた事件」と一筆書きにしてみせ、それ故に、《表現者たちは誰も手を触れようとはしなかった。不用意に近づけば、ブラックホールに吸い込まれるようにして、こちらが解体されてしまうかもしれない。一度は対決しなければならない歴史なのだが、表現者たちは一日のばしにして自分だけが生きのびてきたのだ。》と書いている。

連合赤軍事件の捉えかた以前に、「ラディカル」といい「論理」といい、作家にしてはあまりにも言葉が無造作に使われすぎている。革命運動のラディカルさと、左翼の活動が銃器を駆使するに至ることとははっきりと区別されなくてはならないし、「論理を先鋭に追い詰めてい」ったのではなく、論理が先鋭に空回りしていった果ての同志殺しであった筈である。《たしかに批判の武器は武器の批判に取って代わることはできず、物質的な力は物質的な力によって転覆されなければならない。しかしながら、また、理論はそれが大衆をつかむやいなや物質的な力となる。理論は、人に証明するや否や大衆をつかむことができるようになるのであり、理論は、それがラディカルになるや否や人に証明するのである。ラディカルであるということは、ものごとを根本においてつかむことである。しかし、人間にとって根本は、人間そのものである。》と、マルクスは『ヘーゲル法哲学批判序説』で述べている。

理論のラディカルさにおいて彼らは銃器を手にしたというよりも、理論が追いつかない主観的な心情の追い詰められかたの急激さにおいて彼らは銃器を手にしたのであり、その意味では彼らが銃器をつかんだ以上に銃器が彼らをつかんだのである。銃器につかまれた彼らが「人間そのもの」の根本をつかむラディカルな運動に向かうよりも、「人間そのもの」の根本を滅却する方向に赴くのは必然であった。つまり、彼らは国家権力に刃向かって行使すべき銃器を、国家権力の見えなさの中に現れてくる自分たち組織的人間の関係の矛盾に向かって発砲せざるをえなくなってしまったのだ。彼らの革命を思い描く心情がラディカルであったことは一度もなく、まだ見ぬ革命という恋人に出会うための通路を銃器で敷き詰めていくなら、一人の人間もない革命に行き着く以外になかった。

連合赤軍事件はしたがって、立松和平がみるように、「幾時代かをとおして連綿とつづいてきた精神活動を、斧で断ち切るようにして断絶させた事件」であるよりも、「幾時代かをとおして連綿とつづいてきた精神活動」の急激な噴出であり、その衝撃に耐えかねる自己終結を浮き彫りにしてみせたのである。この事件に「不用意に近づけば、(…)こちらが解体されてしまうかもしれない」と立松和平が書くが、本当は解体されるまで近づく必要があったのだ。こちらが解体されなくてはならないのに、解体されないように「一度は対決しなければならない歴史」とみなして、解体されないところで小説『光の

雨』を執筆してきたことを表白している。このことは連合赤軍事件について書いても、彼は少しも解体されなかったということであり、事件を横目で睨んで通り過ぎてきた多くの表現者たちと同様、立松和平もまた、確かに書きはしたけれども、「一日のばしにして自分だけが生きのびてきた」ということではなかったか。

連合赤軍事件に向き合って自分がもし解体されることがあるなら、その解体の度合いだけ、事件の内に踏み入ったことを示しており、それは事件に対する見方が根底から引っくり返ることで明らかにならなければならない。解体されない近づきかたをした立松和平は、『光の雨』を書く前と書いた後の自分がほとんど変わっていないことを確認して安堵したのかもしれないが、連合赤軍事件について書いても自分の見方が変わらないのであれば、書いても仕方がなかったのだ。このことは映画『光の雨』の高橋監督についてもいえる。彼は、連合赤軍事件についての映画を撮った後の自分がどこまで変わったことを意識していたか。《この事件を映画化するというけじめをつけないことには、自分が21世紀を迎えられないという気持ち》をもち続けていた彼は、その「気持ち」が事件の映画化のプロセスで、21世紀を迎えられるような自分へと足を一歩踏み出したことが感じられるようになっていなくてはならなかった筈だ。

映画の中で自分の短歌を使われた歌人の福島泰樹もまた、同様である。『正論』平成13年12月号にこの映画について書き、《1972年2月、浅間山荘銃撃戦。それに続く遺体発見。そして、60年代後半以後のあの時代の運動を（革命的に）担った若者たちは口を噤んだまま、今日へと至るのである。しかし、これだけは言っておこう。あの時代を貫いた自己否定の論理は、国家権力に拮抗すべき強固な個「革命兵士」を確かに生むに至った。（生き残った者も殺された者も）彼らは、革命兵士として誇らしく死んでいったのである。そう思いたい。／雪山を越えてゆく兵士たちの行く手に、美しく降り注ぐ光の雨に、私は泣かされていた。》間に、《雪山をせつせつとゆく男らに疾風のごとく呼びかけんとす》という一首を挟んで、《なに一つ終わってはいないのだ。》という一行で締め括っている。

そう、「なに一つ終わってはいない」し、これから「なに一つ終わ」りはしないだろうが、問題はなに一つ始まりはしないということにある筈だ。立松和平の小説『光の雨』も、高橋伴明監督の映画『光の雨』も、そして福島泰樹がこう書くことも、どんな始まりも指し示すことはない。「彼らは、革命兵士として誇らしく死んでいった」と「思いたい」ことで、福島泰樹は一体なにを願っているのか。彼らは反革命兵士として断罪されて処刑されていったのであり、革命兵士や反革命兵士の衣装を剥がすなら、やはり彼らは一人の若者として、殺される理由をなに一つ持たずに殺されていったのだ。そこを厳しく見据えておかなければ、「革命兵士として誇らしく死んでいった」という見方は、たとえば戦前日本の帝国陸軍兵士として誇らしく死んでいったと、「そう思いたい」

という心情を受け入れねばならなくなるだろう。生き残った者による殺された者たちに対するそのような美化が、殺された者たちの尊厳を高めることは決してなく、生き残った者の慰めにすぎないことは明白ではないか。

「たしかに批判の武器は武器の批判に取って代わることはできず、物質的な力は物質的な力によって転覆されなければならない。」というマルクスの言葉を頭に叩き込んで、連合赤軍の若者たちが国家権力の武装に対抗する武装の途へと足を一步踏み出したことは間違いない。言葉による批判はただそれだけのことで、銃器に取って代わることはできず、武装した国家権力を転覆するにはこちらでも武装して戦い抜く以外にないと彼らは思い詰めた。しかし、マルクスは彼らが受けとめた中に生きていただろうか。「批判の武器は武器の批判に取って代わることはでき」ないということは、武器の批判もまた批判の武器に取って代わることをできないことを意味する。マルクスはここで、言葉による批判の延長線上に武器による批判を位置づけているわけでは決してない。私の考えでは、武器とはなにか、「物質的な力」とはなにかを問うているのだ。

「物質的な力」とはなにか。理論が「大衆をつか」んだときに、そこに「物質的な力」が形成される。なぜなら、理論につかまれ理論をつかんだ大衆は必ず行動に赴くからである。では理論はどのようなであれば、「大衆をつかむことができるようになる」のか。理論がラディカルでありさえすれば、それは自らを「人に証明する」ことができる。つまり、大衆はその理論によって自らの足許が照らしだされて、どこへ向かって足を差しだせばよいのかが彼らの頭に反芻されるようにして、物事が一つ一つ論理的に解明され、そして説得されていくのである。理論がラディカルであるのは、人間そのものがそれによって根本からつかまれているからだ。ラディカルな理論は「人に証明する」途が拓かれていることにおいて、必ず「大衆をつかむことができるようになり」、「大衆をつか」んだ理論は実践への途を踏みだすことによって「物質的な力」となり、その「物質的な力」はやがて「武器の批判」を展開するに至るということだ。

マルクスの先の言葉で注意しなくてはならないのは、理論のラディカルさを説いていても、「武器の批判」や「物質的な力」のラディカルさを説いていないことである。理論がラディカルであるかどうか、その言葉がラディカルであるかどうかであって、革命とは革命的な理論が自らを現実的に展開するプロセスにすぎず、革命的な理論が不在の場所に革命が育まれる余地がないことは明白である。「理論はそれが大衆をつかむやいなや物質的な力となる」ということは、「大衆をつかむことができるよう」な理論のラディカルさそのものが、すでに武器にほかならないということだ。理論が「大衆をつかむ」以外のラディカルさもなければ、それ以外の武器もありえないという若きマルクスの断言が響き渡ってくる。

理論が「大衆をつかむ」ということは、大衆をその発生の自然過程においてつかんで

いるように見える国家（の理論）から奪い返すことにほかならない。同化している国家（の理論）から大衆を強力に引き剥がさなくてはならない。もし理論が「人間そのもの」を根底からつかむラディカルさを内蔵しているなら、理論は「大衆をつかむことができるようになる」ことを、マルクスは確信しているようにすらみえる。マルクスにとって「人間そのもの」をつかむことは、「大衆をつかむ」と同義であるからだ。本当は大衆はまだどの理論によってもつかまれているわけではない。国家（の理論）ですら大衆に寄り添っているだけであって、大衆は国家（の理論）につかまれているわけではない。まだ真に大衆をつかむような理論は登場していない。ということは、革命はまだ遠く、ラディカルに生きることでできる人間が登場する余地はつくりだされていないということだ。

理論が「大衆をつかむ」ということは、その理論の中で大衆がこれまで以上にもっと大きく生きることが感じられると同時に、大衆の中でこそ理論が生き活きと呼吸しはじめることを意味しているにちがいない。理論のラディカルさとは言葉に凝縮された人間の精神活動のラディカルさにほかならず、その精神活動のラディカルさが大衆によって身体的に展開されるならば、そこに「物質的な力」が生みだされ、理論による「批判の武器」は身体による「武器の批判」へと形を変えていく。連合赤軍がマルクスの文脈から、「たしかに批判の武器は武器の批判に取って代わることはできず、物質的な力は物質的な力によって転覆されなければならない。」という一行のみを切り取って、理論のラディカルさを無視し、「武器の批判」や「物質的な力」のエスカレートにラディカルさを求めていったことはいうまでもない。

なぜ彼らは、マルクスの言説を正しく読み取ろうとしなかったのか。なぜ理論のラディカルさを切り捨ててしまったのか。それは、彼らに理論のラディカルさが不在であったからだ。彼らは公安警察の徹底したローラー作戦によって追い詰められていただけでなく、理論のラディカルさの不在によっても追い詰められていたのである。一時は全国的に盛り上がった大学闘争の退潮期に、自分たちのセクトの存在価値をアピールするように、理論のラディカルさの不在を威勢のよい言葉の羅列と武装のエスカレートによって穴埋めしようとしたのが、連合赤軍であった。大衆の中に求めるべき「物質的な力」を銃器に求めたのである。

連合赤軍事件についてよく指摘されるのが、赤軍派と京浜安保共闘という、本来なら対立し合っても手を組む筈のない思想基盤の異なるセクト同士が、軍事路線で一致し統合したために、時間の経過の中でその縫い目がしだいに綻びをみせ始め、リンチ殺人に至ったという見解である。だがそれは山岳アジトを転々とするプロセスでの出来事であって、連合赤軍がリンチ殺人に至る途は、「物質的な力は物質的な力によって転覆されなければならない」というマルクスの一部の文言を至上命題とすることによって、軍事

路線に踏みだした行程にすでに敷き詰められていた。これまでの大衆的な街頭闘争が行き詰まって、軍事闘争に活路を見出す方向に転換したのであれば、これまでの思想的背景にどれほどの隔たりが存在しようとも、軍事路線で一致できる相手と握手しようとするのは必至であった。

銃器を手にすることによって、彼らは明らかに大衆闘争の一線を踏み越えたのであり、彼らの意識の中では「物質的な力」と「物質的な力」の激突が開始されたのである。つまり、殺すか殺されるかの戦場に踏み入ったということだ。いうまでもなく戦後生まれの彼らにとっては初めての戦争であった。しかしながら、戦争といっても味方は数十人の規模で、武器にしても散弾銃や猟銃程度の銃器であり、山岳地帯を逃げ回るといって圧倒的な劣勢のなかでの部隊にほかならなかった。しかも男女混合の部隊であり、軍隊経験のない急ごしらえの兵士集団であったから、部隊が自壊しないための規律を徹底化させることにも無理があった。また軍隊経験のない彼らが軍隊の範型を、彼らが否定してきた筈の、映画等を通じて見知っている日本帝国陸軍の軍隊に求めざるをえなくなっていくというアイロニーにも足を^{すく}拘われていった。

だがなんといっても最大に露呈されたのは、革命を志向する兵士集団の内部でさまざまに生起する問題を、革命精神の強弱というフィクショナルな概念を設定して処理するというアイロニーに見舞われたことである。現実の根本的な矛盾を革命の実現によって解決し、その矛盾から解放されることを望んで蹴起したであろうのに、彼らの関係性の矛盾がどこにもありはしない革命精神で断ち切られてしまうという不条理を味わわねばならなかったのだ。おそらくこの問題は、現在の社会体制よりももっと心地よい社会体制を夢見て革命を志してきた筈の集団が、よりによって現在の社会体制下でも通常起こりえない仲間殺しを惹き起こすことになったのはどうしてか、という問いとリンクしていると思われる。

連合赤軍が社会体制を転覆させようとする革命集団であったなら、彼らは革命の二文字を背負ったときから、普通の人では直面することのない矛盾に晒されなくてはならなかった。頭で現実の社会を否定しながら、身体はこの現実社会を生きていかねばならないという矛盾にたえず晒されていたのだ。変革の二文字を自らに課した者は、この矛盾を免れることはできなかった。というより、変革とはこの矛盾に向き合いつづけて、更なる矛盾に突き入ることにほかならなかった。《人間は、狡猾に秩序をぬってあるきながら、革命思想を信ずることもできるし、貧困と不合理な立法を守ることを強いられながら、革命思想を嫌悪することも出来る。自由な意志は選択するからだ。しかし、人間の状況を決定するのは関係の絶対性だけである。ぼくたちは、この矛盾を断ちきろうとするときだけは、じぶんの発想の底をえぐり出してみる。そのとき、ぼくたちの孤独がある。孤独が自問する。革命とは何か。もし人間の生存における矛盾を断ちきれないな

らばだ。》

『マチウ書試論』の中の若き吉本隆明の言葉が不意に甦ってくるが、連合赤軍は「自由な意志は選択する」ところから、もはや「自由な意志は選択」しえないところへと河を渡ってしまったのである。一線を越えたのであり、後戻りは許されないと彼らに考えられていた。「自由な意志」のきかない一線を越えたところで、彼らもまた「革命とは何か」を自問していたにちがいがなかった。しかしながら、一線を越えたと判断し、「革命とは何か」と自問するのはすべて頭の中であり、身体の方は一向に一線を越えているわけではなかった。この状況でどんな矛盾に晒され、対立はどのようなかたちをとって起こるかははっきりしていた。矛盾がどうしても頭の中の革命的な観念性と身体の方の非革命性との大いなるギャップのうちに現れるなら、対立は頭と身体の方の非和解性として噴出する以外になかった。

頭と身体の方の対立はもちろん、集団内ではリーダーと下部兵士の対立として現れる。一線をどうしても越えられない身体は当初は、お化粧をして男性の気を引こうとしているとか、髪が長いとか、服装が派手だとかのかたちをとって女性に集中し、挙げ句の果てに女性の方の容貌が問題視されていく。やがて男女間のセックスをめぐる問題に拡がり、頭は革命精神とは無縁な身体の方の日常性を反革命性として指弾するに至る。

「革命とは何か」という彼らにとっての自問は、外の世界に革命の証を一つも見出すことができない分、革命の妄想に乗っ取られた頭に身体を従属させていくかたちで頭と身体の方の乖離、矛盾を解消させようとしていくのだ。当然、身体の方の日常性は抹殺され、身体そのものが亡霊と化するほかに途はなくなる。リンチ殺人は集団内部における個々人の身体性の方の抹殺により生じた結果であって、革命の観念に頭だけでなく、身も差しだそうとするなら、それは避けられない事態であった。

連合赤軍が革命とは無縁な集団であったなら、リンチ殺人など当然起こりえなかった。また銃器を手にする闘争へと突っ走ることがなければ、その銃器を自らに突きつけるようなことも起こりえなかった。革命の観念も銃器も、彼らが頭上に掲げたものはすべて、自分自身を抹殺するかたちをとって成就しようとしていたのだ。映画『光の雨』は、身をもって革命の観念の中に踏み入ることがどれほどの激烈な矛盾の真っ只中に当事者を立たせ、革命されるべき社会で培われてきた日常性そのものを憎悪せずにはいられなくなるか、つまり、その憎悪の中に革命の精神を覗き込まざるをえなくなるという倒錯した集団心理にまで迫って描写する必要があった。革命の観念に身も心も委ねてしまうことによって湾曲を強いられていく偏差の中で、否応なしに担わされる負荷の軌跡として描かれなければ、連合赤軍事件の悲劇は我々の手元にいつまでも還ってこないと思われる。

2002年5月5日記